

博士学位論文審査要旨

2012年2月1日

論文題目：米国高齢者の生活の質についての研究：

多世代包摂性をめぐる地域コミュニティの4つの事例研究

学位申請者：加藤 泰子

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 池田 啓子

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 細谷 正宏

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 荻野 美穂

要 旨：

本論文は、米国の大都市郊外、大都市都心、地方のスモールタウン、そして退職者コミュニティという、異なる地域コミュニティでの四つの事例研究の考察を通して、退職後の高齢者の生活の質を高める要素がどのように創出されるのかを、活動理論、コミュニティ論、社会的ネットワーク論などに立脚し、居住環境や社会的交流活動に焦点を当てて、探究したものである。

論文は、序章をいれて全六章で構成されている。論文の中心となる一章から四章は、上記の四つのコミュニティにおける実証的事例研究であり、それぞれの住環境の物理的、社会的環境要素が、退職者の役割獲得にどのように作用するかを、多世代包摂性という概念を軸にして考察している。ニューアーバニズムの街メリーランド州のセントランズでは、街ぐるみで多世代にまたがる役割相互依存関係のサイクルをつくりだしていること（第一章）、シカゴ市都心のコンドミニアムでは、社会貢献的活動に参加することで高齢者自身が主体的に役割をつくりだしていること（第二章）、ウィスコンシン州のウーストブルクでは、家族内での役割が継続し教会を通しての多世代交流が行われていること（第三章）、メリーランド州モンゴメリー郡の高齢者コミュニティ、レジャーワールドでは、趣味や関心をともにする同世代同質結合型のつながりが中心になっていること（第四章）を、エスノグラフィックに描き、それぞれの住環境の特性が、どのように退職者の生活の質と関連しているかを考察した。その結果、高齢者が、異なる世代と協働し、相互依存の関係を通じて関わり合うなかで、新たな役割を獲得することによって、退職や家族のライフサイクルの変化によって経験される存在意義の喪失感から解放され、満足感や幸福感を見出し生活の質を向上させていると論じている。

長寿が大衆レベルで現実のものとなった今日、退職後の生活が人生のほぼ三分の一にも達するようになった。高齢者研究では、このライフステージを研究する事の重要性が指摘され、なかでも、いかにしてこの時期の人生を豊かなものにするか（successful aging）という問題に取り組むことが必要とされている。本論文は、人類学的手法を用いて、この問題を探究しようとするものであり、多世代包摂性と役割創出の関係を住環境および社会的関係と関連させながら仔細に描き出している点で新しい視点を提供するものであり、高く評価できる。また、高齢者の生活の質については、従来は量的研究が多く、質的研究はまだ少数である。福祉や高齢者政策の分野でも質的研究の必要性が指摘されている今日、この論文が貢献するところは大きいと考えられる。

なお、本論文の調査はミドルクラスを対象としている。質的研究をめざす以上、階級に加えて race や gender についての踏み込んだ分析が加われば、一層深みのある研究になったであろうが、そのことは決して本論文の意義を損なうものではなく、むしろ、今後そうした方向に研究を深化

させるための重要な基盤となる研究として評価できる。

本論文の一部は、日本都市社会学会などの三つの学会で、口頭発表を行い、同志社大学で行われた Human Security Conference においては、英語でも口頭発表をしているほか、論文三編(うち査読つき論文二編)、研究ノート一編(査読つき)および研究分担者として執筆した科研費基盤研究(B)報告書などで発表されており、高い評価を受けている。

よって、本論文は、博士(アメリカ研究)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2012年2月1日

論文題目：米国高齢者の生活の質についての研究：
多世代包摂性をめぐる地域コミュニティの4つの事例研究

学位申請者：加藤 泰子

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 池田 啓子

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 細谷 正宏

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 荻野 美穂

要 旨：

加藤泰子氏は、2011年7月15日に実施された博士論文予備審査を受け合格した。予備審査では、論文の概要について30分の発表をし、3人の審査委員から約40分にわたる質疑を受け、充実した発表内容および的確な返答などが高く評価された。また、予備審査では、外国語能力（英語）の確認も行われ、博士論文提出に必要な条件を備えていると判定され合格した。その後、論文を仕上げるにあたり審査委員から指摘された問題点やコメントに真摯に対応し、11月28日に博士論文を提出した。それを受け、12月6日の教授会で審査員が選考され、上記3人の審査員が博士論文審査にあたることとなった。論文審査にあたり、追加資料として、予備審査以後、審査委員の指摘にどのように対応したかをまとめた文書を提出し、その内容は満足のいくものであると評価された。2012年1月16日に行われた博士論文最終試験（公開口頭試問）では、40分の発表と40分の質疑応答を行った。パワーポイントをつかった発表は、博士論文の論点、研究背景、研究方法、研究の意義などを手際よくまとめたものであり、さらに、引き続き行われた質疑応答では、専門分野および方法論などについて多角的な側面から質問がなされたが、それぞれの質問に対し真摯かつ的確な返答が行われた。公開審査終了後、審査委員が協議した結果、博士（アメリカ研究）の学位を受けるにふさわしいと認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 米国高齢者の生活の質についての研究：
多世代包摂性をめぐる地域コミュニティの4つの事例研究

氏名： 加藤 泰子

要旨：

本研究は、米国の大都市郊外、大都市都心、地方のスモールタウンという、異なる地域コミュニティでの4つの事例研究の考察(第1章~第4章)から、退職後の高齢者が生活の質を高める要素がどのように創出されるのかを、居住環境や社会的交流活動に焦点を当てて、活動理論、コミュニティ論、社会的ネットワーク論などの先行研究を踏まえた上で探ったものである。本研究の考察は、調査対象者へのインタビュー、質問紙調査、施設への訪問観察、文献資料から得られた資料分析にもとづいている。

長寿化に伴って、退職後の生活は、人生の3分の1近くにまで達し、我々のライフサイクルの中で、非常に大きな意義をもつようになっている。そのため、この時期についての高齢者の生活の質を議論する研究分野が重要度を増している。しかし、医療や介護福祉などの、高齢者のいわゆる非日常の問題からのアプローチの豊富さに比べると、ほぼ健康な高齢者の、ごく日常の生活に焦点を当てた研究は、多くはない。

本研究は、元気に日常生活を送る大多数の高齢者の、とりわけ退職後の生活を精神的に豊かにする要素(生活の質)の追究を目的としている。特に、高齢者が人々との社会的交流活動の中で果たす役割の重要性に着目した。役割をもつということは、社会の中で自分の場を得ることに他ならない。それは、自分が何らかの意味で社会的価値を帯びることである。そしてこれが、精神的に豊かになる要素の一つとなる。高齢者が退職生活の中で新たに獲得する役割に注目したのは、ライフステージの移行によって、それまでの役割の縮小や喪失が、高齢期に発生するからである。本研究では、高齢者の役割を生みだすものとして、世代間の関わりという視点で高齢者の社会的交流活動を考察した。

その結果、多世代包摂的な活動から生み出される役割は、高齢者の役割の喪失感を補う多様な意義があると結論づけた。多世代包摂性とは、多様な世代が単に同じ場に存在する多世代型環境に留まらず、それらの異なる世代同士が協働あるいは、相互依存の関係をもち、関わり合う状態だと定義する。

本研究では、4つの事例研究を通して、高齢者が居住する地域の環境要素や高齢者による居住地への評価を検討した上で、高齢者が地域コミュニティで担う役割について、役割の獲得を促進させる物理的・社会的環境要素を中心に考察した。そしてそれらの背景に多世代包摂性という要因がどのように貢献しているかを分析した。

第1章で対象とした、大都市郊外の計画住宅地におけるコミュニティでは、第1節でタウンプランニングによる住宅地の設計・デザインと、建設理念としてのスモールタウン的なコミュニティという概念的なメッセージが、コミュニティ志向の住民集団の形成を促し、住民の間のコミュニティ意識の育成の潜在力となっていることを明らかにした。多くの住民は、郊外住宅地というカテゴリーの中にありながら、この住宅地がどこへでも歩いて行ける近接性をもっていることに価値を認め、近隣の人たちとの気軽な交流ができるという環境に大きな満足感をもっていた。

コミュニティ意識の創出の潜在力を顕在化させる機動力の一端を果たしているのが、第2節で詳しく取り上げた住民組織であった。この住民組織が共通メディアを発信し、祭りやイベントやクラブ活動などの創出を通して住民の間のコミュニティ意識を引き出す実質的な力になっていた。そして、地域行事「5K レース」で観察された高齢者住民の役割意識は、レースを成功させるための住民全体の

相互依存関係のサイクルの内側にその一部として位置づけられているという自覚、つまり、地域コミュニティでの多世代包摂的環境から由来する社会的存在感によって生じていた。そのような関係を「5K レース」行事が創出していること、それによって高齢者が、ライフステージの移行で減少させた個人としての役割の補完として、コミュニティでの役割を新たに獲得していると分析した。

第2章では、大都市都心のコンドミニアムに居住する高齢者の都心居住に対する評価を記述した上で、彼らが、日常生活の中で、このコミュニティの内外で関わっている社会的交流活動について、交流する世代との関連を考慮に入れて分析した。

彼らが都心居住をもっとも評価しているのは、買い物や医療など日常生活に必要なものや劇場や美術館や博物館などの都心アメニティへの近接性と都心居住の典型的形態である、コンドミニアム居住による住宅管理の軽減であった。対象とした高齢者の多くが、それまでのライフステージでは、郊外で一戸建ての居住形態を取っていたが、高齢期を迎えて彼らは、都心のコンドミニアムという居住形態に移動したのである。

彼らがそれぞれに関わっている社会的交流活動全体としては、地域社会の幅広い世代の住民に対する貢献的活動が非常に多く行われていることが明らかになった。これらの貢献的活動を通して、異なる世代との関係が生まれ、高齢者がライフステージの変化の過程で縮小・喪失した役割に代わるものとして意義のある、新たな主体的役割が豊富に創出されていた。この背景には、都心アメニティが豊富なことによって、活動の機会の総量が多いという環境要素があった。

第3章で観察したのは、地方のスマートタウンでの居住に対する評価と、そこで高齢者たちがそれぞれに関わっている社会的交流活動である。

スマートタウンでの居住の利点として挙げられたのは、親族との近接性による交流の容易さ、村の人々とのカジュアルな交流関係、安全な環境などの点であった。

彼らに関わる社会的交流活動へのコメントを通して明らかになったのは、家族の役割が大きな断絶を伴うことなく、ライフステージの移行においても、親としての役割と祖父母としての役割が途切れずに連続しているという特色を持っているということであった。そしてそれを可能にしているのが、親族との近接性のあるスマートタウンの居住環境であった。日常の交流圏の中に親族、特に子どもや孫や、しばしば彼ら自身の親たちさえもがいることで、親族との交流が、彼らの社会的交流活動の主要な部分を占めていた。

一方で、クラブや組織などのフォーマルな活動や学習活動などは、彼らの社会的交流活動の中でそれほど大きな位置を占めてはいなかった。その点は、関心や趣味を共にする多くの活動から役割意識や同質結合の感覚を得ていた大都市圏の高齢者の社会的交流活動の内容と異なる部分であった。それは、フォーマルな活動の機会の多寡といった環境要素の違いにも由来するのだが、そういったものからの明瞭な形での役割補完を必要としない地域社会に彼らが居住していることも一因であることがわかった。住民には、教会への礼拝や教会行事や一年を通じて行われている何らかの教会を通じた活動を通して「教会コミュニティ」が形成されており、それによってコミュニティの幅広い世代の住民との関わりが生まれ、村の地縁につながっていた。

第4章では、高齢者コミュニティについて考察した。米国では、高齢期の過程の中で、年齢の上昇とともに高齢者が考慮に入れる居住形態の選択肢の一つとなりうるものである。

大都市郊外、大都市都心、地方のスマートタウン地域の一般居住の高齢者住民による将来の居住に対する意識については、日常の生活が難しくなっても、ケア提供者を雇うことによって、できる限り長く自宅で過ごしたいと考えている人が多かった。高齢者コミュニティについては、積極的に評価した人は少なかったが、必要なものであるとのコメントも何人かによって言及された。

これを踏まえて、高齢者コミュニティにおける高齢者の生活の質を、利便性、安全性、活動性、多様性、外部の家族・友人とのつながりの5つの項目から分析した。

事例として考察した高齢者コミュニティでは、クラブや講座やグループ活動が豊富にあり、特にレジャーを中心とした同世代間の社交的活動が多く行われていた。高齢者コミュニティのように、高齢

者世代だけが利便性や安全性などのサービスを購入する形の環境においては、第1章～第3章の事例で取り上げたように、社会的交流活動の中で、貢献的な活動から得ているような役割意識というよりも、趣味や関心を共にする同質結合傾向や同世代間の友情関係の方が起こりやすいといえる。この関係が得られることも、その他の章でも考察したように、高齢者の社会的交流関係に満足感を与える要素の一つとなっているが、社会的存在感は、社会の中の多様な世代との相互関係の中で主体的な役割を果たしているという感覚によって、よりいっそう意識化されることを考えると、高齢者コミュニティでの環境要素は、内部環境だけに注目すると、それが達成されやすい環境とは言えず、この点において課題を残していると分析した。

これらの事例から、地域コミュニティの中の高齢者の生活の質を追究する過程で重要な要素として浮かび上がったことは、異なる世代が相互に関わり合いを持つ、多世代包摂性から多くの役割が生まれて、高齢者が生活の質を向上させるための社会的環境要素として寄与しているということであった。生活の質は、高齢者自身の側に評価基準がある、主観的な側面が大きいですが、多世代包摂性は、高齢者がどのように彼らを取り巻く物理的、社会的環境要素を解釈するかという、評価基準に影響を及ぼしていると考えられる。